

弁長・良忠の鎮西義について

細川 行 信

はじめに

源空の遺法を継承し、その伝法の器に恵まれた聖光房弁阿弁長を派祖とする鎮西義について、『浄土源流章』には、鎮西筑後国善導寺本願聖光上人者浄教賢哲学解英匠随法然上人久営学業鎮西弘教とあり、つづいて次のように載せる。

多生門輩乃慶蓮社招蓮社等是也模匡廬山古風故也光公門人亦有良忠公学解英哲宗教鸞鳳也五祖虬文多播鈔解字号然阿初住鎮西学業独步中比遊住下総国大弘浄業多生法匠上華洛弘通宗旨一

すなわち、これによれば、弁長の後継者として然阿良忠

が師の念仏義を弘通したことを伝える。したがって今は、弁長と良忠の師弟による鎮西義をうかがいたい。

一

まず、弁長の伝記に関しては、その資料として『鎮西上人略縁起』や二種の『鎮西上人伝』など、古い伝記があったというが、いずれも現存しない。したがって、これらに次いで古い伝記資料として望西楼了恵の『聖光上人伝』一卷、および源空伝資料の『伝法絵』・『法然上人伝記』（九卷伝）・『法然上人行状絵図』などにより考察することとしたい。

ところで、了恵の『聖光上人伝』は、終わりに「嵯弘安七年甲申臘月上旬菩薩戒比丘了慧謹疏」と誌し、弘安七年

(二二八四) 十二月上旬に撰集したもので、その前に「凡厥生前懿德沒後靈瑞或聞^二忠師之伝説^一或依^三入阿^{敬蓮}之記録^一、粗記^二梗概^一專備^三報恩^一而已」と記載するように、了恵は師の良忠よりの伝聞と敬蓮社の記録(『鎮西上人伝』)によった事、ついで三年を経た弘安十年(二二八七)十一月に追記を加えた。これは、嘉禎四年閏二月廿九日の弁長入寂と、此の伝を草し更に再治せんとした弘安七年十二月夜の夢想についてであり、弁長——良忠——了恵の相承が強調されている。ここにも、弁長・良忠の師資における念仏義の相承がうかがえるが、それはまた、弁長が歿した嘉禎四年(二二三八)から四十七年目の撰述であり、現存の列伝として最も古く、とくに信頼すべき伝記として、後世、信問(一二七五—一八二〇)により纂輯された事も知られる。

さて、了恵の『聖光上人伝』には、弁長は筑前国加月荘の人で、応保二年(一二六二)五月六日の誕生を伝えてゐる。加月は遠賀郡香月で、『香月系譜註』によれば、父は香月氏の家臣古川弾正左衛門則茂入道順乗という。七歳の時より菩提寺の妙法に師事し、十四歳で得度してより、白巖寺の唯心に三年、明星寺の常寂に五年、合わせて八年のあいだ天台を学んだが、寿永二年(一一八三)叡山に登り、東塔南谷の観叡の室に入り、ついで宝地房証真について台

教の奥義を極めた。さらに建久元年(一一九〇)二十九歳にして故郷へ帰り油山の学頭となったが、弟の頓死によって世の無常を感じ、往生の行業を修したという。のち明星寺の衆徒を請じて廃絶していた同寺の三重塔を再建し、建久八年(一一九七)五月上旬、塔中に安置する本尊を迎えるために上洛したところ、かつて証真が常に讃めていた源空の禪室をたずね、起立塔寺が疎雑の業である事を聞き、称名の但念仏義に帰したが、時に三十六歳であつた。かくて、翌建久九年(一二九八)『選択集』の付属を受けると共に、伊予に到つて伝道したと伝え、翌年帰洛した。元久元年(一二〇四)八月上旬、四十三歳にして鎮西へかえり、筑後高良山厨寺において如法念仏を修し、のち同国山本郷に一寺を建立して善導寺と号した。さらに安貞二年(一二二八)肥後往生院において四十八日の別時念仏を修し『末代念仏授手印』を作つた。嘉禎元年(一二三七)夏には『徹選択集』二巻を著わし、同年八月一日、浄土宗の法門を然阿良忠に付属した。しかし、嘉禎三年十月已後は食欲がなく、翌年正月二日に頸下に腫物ができたが、毎日六万遍の称名を欠かさず、ついに閏二月二十九日未刻、七十七歳を以て眠むるが如く息絶えたと伝える。

以上、弁長の生涯を略述してきたが、さらに、その念仏

者としての特徴を私なりを考察してみたい。

これについて、まず初めて源空をたずね浄土門に入つた、いわゆる入浄は三十六歳、師源空六十五歳の時で、その五月より七月までの三箇月間は「片時不離座下敬慕勸化」(『聖光上人伝』)とつたえる。しかも、その翌年には『選択集』が撰述されている事から、源空の最も円熟した頃に入室し、選択付属と伊予教化の後、師の許で参学し「年光逡巡六箇年」也(從建久十年五月至元久元年七月)「(『聖光上人伝』)とも、また自ら「三十六ト申セシ年ノ五月ノ比ヨリ法然上人御房ニ参テ四十三ノ歳マテ弁阿ハ八年相副進セテ浄土ノ法門ヲ奉レ彼レ教候シニ」(『念仏名義集』中)ともいい、その受法の自信の程がうかがわれる。

次に、その修学について『聖光上人伝』に

凡日参学都無懈怠_{三論達摩}非_{菩薩戒等}宮聞_{天台}浄土_{華嚴}兼亦涉余宗

と載せるように、聖浄兼学の立場を採ったことに留意しなければならぬ。したがって、かかる融会・学解的な姿勢からすれば、聖道門側よりの恒常的な念仏弾圧のなか、いわゆる鎮西義が後に京都へ進出して、その地盤を獲得するのも当然なことと考えられる。

さらに、その相承についてであるが、これには、後に

良忠という希有なる後継者に恵まれた事は勿論、弁長の鎮西義が念仏の正統義であるためには、何をおいても先ず源空と弁長の間の、いわゆる師資の相承を主張せねばならぬ。しかも、それは源空滅後における異義の蜂起を縁として、『末代念仏授手印』をはじめ、幾多の著述をものされ、いずれも師源空よりの相伝を明らかにした。今、『授手印』の序によれば、そこには師教を守成せんとする悲願の程が知られる。しかし、ここでの「靜其義於水火」という批判は、かつて田村円澄博士が「異義蘭菊而邪徒紛々」(『徹選択』上)をあげて、「念仏を、対聖道門との関係において捉えず」・「念仏教団内部の問題に還元して居り」と指摘されたように、弁長その人が聖道門との対決を回避しているところに、実は鎮西義の特色がうかがいえる。

今、このことを一応整理すると、受法の自信、修学の姿勢、そして師資の相承の三つであり、『伝法絵』のなかで撰時の明らかなもの、すなわち源空入滅二十六年後の『本朝祖师伝記絵詞』から、さらに滅後百年に近い『法然上人伝記』、ついで間もなく集大成された『法然上人行状絵図』へと年時が降るに伴って、前記の三点が次第に拡大視されてくるようである。

まず『本朝祖师伝記絵詞』巻第二には、宮廷関係の女

院、公卿を挙げた後に「念仏の帰依おほしといへども、関東には熊谷入道、鎮西には聖光等、教門に入しより他宗をのぞかざるともがら」として、熊谷入道蓮生と聖光房弁長が東西を代表して出され、つづいて弁長について

弟子弁阿者、上人入室後、先遣伊州弘通念仏、還鎮西、建立於光明寺、教道一切衆生、遂往生、宛如本望

と載せるのみである。しかし、同じ『伝法絵』でも、右の『絵詞』よりも少し遅れて編集されたと考えられる『弘願本』と『琳阿本』では、その記載事項が随分と異なる。すなわち、『弘願本』(二)には三重分別の念仏(『摩訶止観』・『往生要集』の念仏と善導の念仏)について記し、また『琳阿本』(五)では『選択集』受写のことを載せる。しかも、これらは共に『行状絵図』(四六)に収録されているが、かかる記載がなされるには、当時ようやく鎮西流の京都進出が考えられ、さらに『九卷伝』(三下)に至ると、弁長が源空よりの正義をつたえ、その念仏義を相承する然阿良忠が勢観房源智の門流を吸収していったものと考察される。

ところで、鎮西義が弁長より良忠へ相承され、とくに良忠の伝導により広く認められた事をめぐり、その師資関係についてうかがってみたい。

まず、両者の出会いは、良忠みずから「弟子嘉禎二年九月八日詣^ヲ三福寺^ニ・始謁^{シテ}先師^ニ」(先師七十五)『選択伝弘決疑鈔』(五)と誌すように、嘉禎二年(一二三六)九月八日、筑後の天福寺においてであったが、この出会いに至るまでの経過は「然阿上人伝」に詳しく載せられる。すなわち、良忠は三十四歳の時、その故郷である石州の多陀寺に幽栖し、不断念仏を修していたが、たまたま生仏法師という僧が来て語るには、善導寺の聖光上人(弁長)が法然上人(源空)の高弟として、智行兼備を以て浄土宗の正統を鎮西に弘めているので、その鎮西へ赴く途中ここに立寄ったという。しかも、生仏は源空の遺弟として、聖光上人・隆寛律師・善慧上人(証空)・勢観上人(源智)の四師のうち、誰が正統な継承者であるのかを案じ、善光寺参詣の途次、隆寛・聖光・善慧の三人の字を書いて深く懷中に納めて、念々称名しながら祈請したところ、善光寺へ一日路前の榊宿で、その夜の夢に、鎮西の聖光房が弘く往生の道を知る旨の靈告をうけたという。こうした生仏法師との縁が、そのころ西方を念じ求道の心やみがたい良忠をして法師に従い、その後を追って鎮西へ赴くに至ったといい、弁長に面謁してより「二箇年間、観經疏法事讃、観念法門礼讃、般若論、註安樂集、選択集^{剌被作加}」(剌被作加) 往生要集并十二門戒儀一一誦伝畢」(『選

『撰弘決疑鈔』(五)と、ひたすら浄土の宗要を学んだが、さらに『然阿上人伝』によれば、未だ師事して一年を経過しないにもかかわらず、師の弁長は良忠を法器として、選んで付属の人と定め、自著の『徹選択集』を譲与している。

ところで、この『徹選択集』は正しくは『徹選択本願念仏集』といい、その奥書によって、嘉禎三年(二三七)六月、安居念仏中に、師恩を念じつつ末法哀愍のために撰述した事が知られるが、実は、これよりも少し前の四月二十日、弁長は『浄土宗要集』(鎮西宗要)を著わしている。すなわち、天保二年版の奥書に

本云嘉禎三年_西四月二十日午_{冠終也}於_三天福寺_{終レ功}
御口筆也但_シ草案_{ナレ} 文体狼藉也後_ニ可_三書直_ス 同聞衆_阿、
持願房、敬蓮社、信称房、執筆然阿

と載せ、この書が然阿良忠の筆受であることが知られる。したがって、その二ヵ月後に『徹選択集』が著わされ、さらに翌七月六日に『徹選択集』を譲与されている。

かくて今は、弁長の著述のなから、とくに『徹選択集』を選んで『選択集』と対照しながら、その念仏義を考察したい。さらに弁長の後を継ぐ良忠(一九九—一二八七)については、その全著作を「五十余巻」とも「報夢鈔」(『然阿上人伝』)ともいって甚だ数おおく、しかも昭和に入

り金沢文庫所蔵の浄土宗典研究によって、良忠に関する未伝稀観の講録も紹介されたが、その殆んどは「東国経廻二十九年」(『然阿上人伝』)の間に著わされたものである。このうち、特に『選択集』の深義を顕彰したのもとして『撰弘決疑鈔』五巻を選び、本書を通して弁長から良忠へ相承された鎮西義を考察してみたい。もっとも、『徹選択集』の本意を解明したものとして、良忠は『徹選択鈔』二巻の書を著わしているが、達意的にして余りにも簡明に過ぎるので、今は敢えて『撰弘決疑鈔』を採りあげたい。なお、この『決疑鈔』は、既に今岡達音氏が指摘されたごとく、下総の匝瑳郡鐺木九郎胤定入道在阿の請により建長六年(二五四)仲秋上旬に執筆されたものである。

二

さて、鎮西義においては、いかに『選択集』が領解されているのか、この点を中心に『徹選択』と『決疑鈔』の上に、その概要をうかがいたい。

まず『徹選択集』は、その書題の始めに「徹選択集任_ニ弟子之昔聞_一」具以述_レ其義_ニ尋_ニ聖教之誠説_一、輒以符_ニ其文_一と示すように、『選択集』の「念仏義宣_ニ徹意_一」(上)として撰述したもので、上巻には『選択集』十六章段の文旨を

略述し、下巻は問答体によって「從^リ別徹^{スルナリ}通^ム」(上)の趣意を述べる。

上巻は、はじめに「選^ニ採^ニ本願念仏集」の題名と「南無阿彌陀^ニ念^ニ仏^ニ爲^ニ先^ニ」の題下の十四字についてで、ここで特に

「南無阿彌陀^ニ念^ニ仏^ニ」の念仏に「三^ニ重^ニ念^ニ仏^ニ之義^ニ」をたて

又第一、念^ニ仏^ニ義^ニ者^ニ是^ニ依^ニ三^ニ部^ニ之阿彌陀^ニ經^ニ記^ニ之^ニ、第二、念^ニ仏^ニ義^ニ者^ニ是^ニ依^ニ善^ニ導^ニ和^ニ尚^ニ觀^ニ經^ニ疏^ニ記^ニ之^ニ、第三、念^ニ仏^ニ義^ニ者^ニ是^ニ依^ニ三^ニ部^ニ之阿彌陀^ニ經^ニ記^ニ之^ニ、此三義^ニ亦^ニ是^ニ行^ニ者^ニ之口^ニ中^ニ所^ニ唱^ニ之稱^ニ名^ニ念^ニ仏^ニ也

として、「觀^ニ念^ニ之念^ニ仏^ニ」でなく「口^ニ稱^ニ念^ニ仏^ニ」であることを明かし、次に「就^ニ三^ニ本^ニ選^ニ採^ニ集^ニ所^ニ載^ニ之文^ニ義^ニ有^ニ其^ニ十^ニ六^ニ篇^ニ、一^ニ之^ニ篇^ニ今^ニ當^ニレ^ニ積^ニ之^ニ」と、以下「選^ニ採^ニ集^ニ」全十六章を一篇ごとに解釈する。

第一篇は第一・教相章について述べるが、標章の「聖道淨土二門」について、まず「就^ニ聖道門^ニ有^ニ其^ニ二^ニ、一^ニ者^ニ大乘聖道^ニ二^ニ者^ニ小乘聖道^ニ」と、聖道門を大乘の聖道と小乗の聖道の二つに分けて説明する。次に「就^ニ淨土門^ニ亦^ニ有^ニ二^ニ、一^ニ者^ニ十方淨土門^ニ、二^ニ者^ニ西方極樂淨土門^ニ」と、淨土門も十方淨土門と西方極樂淨土門の二つに分け、十方淨土門は「所謂^ニ十方隨願往生經^ニ是^ニ也^ニ、又^ニ十住毗婆沙論^ニ易行品^ニ是^ニ也^ニ」、西方極樂淨土門は「所謂^ニ無量壽經觀經阿彌陀經^ニ是^ニ也^ニ、又^ニ天

親^ニ往生論^ニ是^ニ也^ニ」と示し、馬鳴の『大乘起信論』、龍樹の『十住毗婆沙論』(易行品)、天親の『優婆塞持』(願生偈)等より引文し、「怯弱」の機をかえりみて聖道より易行の淨土門へ、そして「隨願往生經」の十方淨土を明かして専ら西方淨土の阿彌陀^ニ念^ニ仏^ニを念ずるといふ、その念仏に通局がある事を示すところに、実は本書撰述の理由があつたようである。これについて良忠は「選^ニ採^ニ集^ニ念^ニ仏^ニ正局^ニ本願稱名^ニ之一行^ニ、智度論之念^ニ仏^ニ廣^ニ通^ニ三^ニ福^ニ六^ニ度^ニ之行^ニ、然^ニ本集^ニ之念^ニ仏^ニ未^ニ積^ニ通^ニ念^ニ仏^ニ之相^ニ、故^ニ從^ニ別徹^ニ通^ニ故^ニ云^ニ徹選^ニ採^ニ集^ニ」(上)と説明するが、こうしたところに、弁長における聖淨融會の学解的立場がうかがわれる。なお、難易二道の典拠として『易行品』よりの引文の前に、「天台大師云、假令得^ニ生^ニ三^ニ人^ニ中^ニ聖道難^ニ得^ニ至^ニ此^ニ名^ニ難行道^ニ也^ニ」と、とくに天台の積文を引くことも留意すべきであろう。かくて、私積に示す捨聖入淨の二由を引文した後、曇鸞・道綽の二師が「積尊之使者」として弥陀の教法を弘めた事を述べ、引きつづいて、終わりに「鈍根無智之我等、設^ニ雖^ニ漏^ニ聖道之根機^ニ不^ニ能^ニ即身斷惑^ニ已降^ニ念^ニ仏之法雨^ニ誰人^ニ不^ニ潤^ニ甘露之妙味^ニ、然^ニ則^ニ雖^ニ先^ニ學^ニ聖道^ニ人^ニ若^ニ有^ニ知^ニ此^ニ旨^ニ者^ニ蓋^ニ棄^ニ聖道^ニ歸^ニ淨土^ニ乎^ニ」と、すなわち、それは即身に斷惑する聖道の機根に対して、鈍根無智の我等が念仏によりて救いに

あずかるべく、聖道を棄てて浄土に帰すべき事を示しているが、それが聖道の根機に「漏」れて「不能」であるという表現をとり、さらに浄土門への帰入について、聖道を学ぶ人と雖も此の旨を知るといふ「学」・「知」の表現は、かつて源空が「浄土門還愚疑二生極楽」(醍醐本『法然上人伝記』)とも「浄土宗安心起行の事、義なきを義とし様なきを様とす」(知恩院藏『護念経』奥書)と申された言葉との間に、微妙な相違がうかがわれよう。すなわち、この事に関して、いわゆる処女作でもある源空十七回忌に著わした『末代念仏授手印』の終わりに「故上人遺誠云我門徒不可好其義、不可好其論」として、さらに「依先師遺誠録之弘通称名之行者」と示し、以て論義を好まず、称名の実践にその主張がうかがわれる。而も、それが「然近代人人学文、先其称名不為物員」是則邪義也邪執也無道心之人也無後世之心也」と記し、「近代人人義」として幸西・証空・行空の「三人義」を邪義として載せる。したがって、こうした学文を先とする思索的な姿勢を厳しく批判し、師源空の多念の称名に倣い、極めて実践的な態度を主張した。しかし実は、このことが実践的な念仏の拠りどころを学解によって裏付けるところに鎮西流の念仏義があった如くである。

次に第二篇に移ると、『選択集』では第二・二行章は相当ながい一章であるにかかわらず、本書での解説は極めて簡略である。すなわち、修すべき「浄土行」について「一者諸行往生、二者念仏往生」と、諸行と念仏の二つに分け、さらに念仏を「一者観行念仏、二者称名念仏」と、観行と称名の二種に分ける。而して、善導の意にもとづく念仏こそ称名の念仏であり、釈尊の付属流通と弥陀本願成就によって決定往生疑い無いことを「先師在世之時如此習之、仍為末代行者具以所教置之」と、源空より相伝した念仏義を末代の行者の為に教えんとするもので、そこに弁長の教化者像が偲ばれる。

第三篇は第三・本願章の解説で、割合に長い一篇であり、往生の本願は、「雙願経」すなわち『無量寿経』に法蔵比丘が師仏に値遇して四十八願を發起した中の、第十八念仏往生の願をいうとして、以下十三の問答を設けて解明する。このうち、第一の問答は「選択」の義についての問に答えて「善導和尚意、念仏者本願往生念仏也、弥陀四十八願之中第十八願是也、此本願義之上、又法然上人檢浄土三部之諸本、校同本異訳之諸文而今勘出法蔵菩薩選択義也、委如選択集、此則末代往生之珍宝也、下根出離之明鏡也、誰不厭之哉」とあって、善導の意によ

って第十八の本願にもとづく法蔵の選択を明かす。ついで第二の問答は「聖教之中以^レ弥陀本願^ニ名^ニ選択^ニ有^ニ其証拠^一耶」の問に対して、まず龍樹の『智度論』を以て引文し、その「選択」ということは「法然上人」すなわち源空の独断ではなく、龍樹から更に法蔵・先仏へとさかのぼるもので、したがって、先仏・法蔵・龍樹と伝統される選択本願念仏の義を、源空によって始めて立てられた事を論証する。ついで第三の問答では、念仏を特に選択と名づける証文の尋問に対して、「一切諸仏之選択」の旨を強調する。したがって、これら三問答を通して、選択本願の念仏が仏道の伝統に立ち、諸仏に讃嘆されることを示すのは、石田充之博士のいわれるごとく「諸仏公認」を明らかにすることによって、浄土宗が聖道諸宗よりの公認を得んとするところ、弁長の苦勞があつた事とうかがわれる。

第四の問答においては「称名念仏是^レ仏方便法^ニ、為^ニ浅智愚鈍^一所^レ設之浅行也、諸仏何故捨^レ深取^レ浅而讃^ニ嘆^一之耶」と、称名念仏が浅行であるという前提において問われ、それに対して「念仏三昧、即是一切菩薩浄仏国土本願之中、其一願也(下略)」と答え、第五の問答では「諸仏何故捨^ニ深行^一取^ニ浅行^一而印^ニ可^一之耶」という問に対して、衆生出離の要法としては称名念仏が深行であるとすると。こ

れは良忠の『徹選択鈔』(上)によれば「一往再往之義」といい、念仏は一往迷情に約して方便の浅行とするが、再往仏智に約して深行として価値転換する。しかも、この転換について述べたものが、第六・七・八・九の問答であつたと考えられる。さらに、第十以下の問答は再び「選択」についての問答であつて、念仏往生を知らんと欲するならば、まず一切菩薩の浄仏国土成就衆生の義を知り、一切菩薩の本願を習うべきであるとして、そこに知ること・習うことの必要性を強調する。しかも、自らの遍歴をかえりみて、昔、聖道門を学んだ時に彼の浄仏国土成就衆生の義を習い、今、浄土門に入つて後に此の選択本願念仏往生の義を相承して、昔と今、彼と此と対応させ、かつて学んだ天台一乘の理念を以て、自ら正しい念仏往生義を会得したというもので、これは「単聖道門人」も「単浄土門人」も知ることができず、「聖道浄土兼学人」にのみ知られるものとして、聖浄兼学の立場を明らかにした。

ついで、第四篇より第十六篇までにおいては、第八・第十二の二篇のほかは極めて短かく、この二篇に約して以下すこしく考察を進めたい。このうち、第八篇は第八・三心章についての解説であり、念仏の行者は必ず三心を具足すべき事に関して、次の如き問答がなされている。すなわ

ち、それは有智の人は至誠心・深心・廻向發願心の三心について知るけれども、無智の倫は知らないので三心を具足しないという。このように、三心を具せない者が往生できないのは、如何なることなのかという問に對し、その三心は決定往生の信心を發して一向專修の念仏を行じ、ひとえに臨終正念を期して退轉懈怠なければ、自然に具足すると述べ、一向專修の称名念仏こそ末代衆生のための決定往生の要法であるとして、その念仏の実踐が三心具足の必須条件なる事を強調するが、それが特に臨終正念を期するところに特色がうかがわれる。

さらに、第十二篇は第十二・念仏付属章についての解説であり、『観經』流通分の阿難への付属を「師云此は至極最要之文也、念仏行者尤可染肝耳」と、念仏付属の文を最も重要な文として、善導の疏より「望三仏本願意在衆生一向專称中 弥陀仏名」とあげて、「智人知智人、是故有釈迦之智人、一知下 弥陀之智人以三名号爲往生之本願上故 而对阿難流通 此經之時付属 弥陀之名号也」と述べ、つづいて「近代有人」として「菩提心」が採りあげられた事は、『選択集』の開版以来すでに問題となり、とくに高弁が『摧邪輪』の中で反論したところである。すなわち、菩提心が「大乘之慈父、菩薩之悲母」とし

て、いわゆる仏道の正因である仏教者の基本的立場からして、源空門下として批判に應えてゆかねばならない問題であつた。これは、『摧邪輪』に「五種大過」として載せる「第一以菩提心不_ニ為_ニ往生極樂行_ニ過」(上)に對するものと考えられ、弁長が分類する菩提心は次の如く図示することができる。



ものであり、念仏往生の後に空・無相・無願の三解脱を証し、神通力を得て還相廻向を成就することも菩提心願であると説く。しかし、今は具縛の凡夫であるから、菩提心を発しても其の行に堪えないので、菩提心を廃するとしたままであり、少しも非難されるものではないとする。なお、これについては、さらに良忠が「菩提心願行事」の一項目をかかげ、そのなかで「但今集『選撰集』意、大乘本意菩提心具足往生是要也、而望三下機云『魔菩提心一向非菩提心』事無其理」(『徹選抄』上)と述べている。さて、上巻には十六篇にわたり『選撰集』の所載にしたがつて釈し、つづいて「八選撰」のほかに、「又加三十二種選撰之義」として逐一列記し、さらに本書の造意について「一者為顯先師上人之広学博覧之智徳也、二者為救濁世末代之小智愚鈍迷惑也」と述べる。そして、また「然則源空随大唐善導和尚之教任本朝慧心先徳之勸称名念仏之勤長日六万返也、依死期漸近又加二万返長日七万返之行者也、如此健以蒙嚴訓畢」と、弁長みずからも多念の日課称名を励んだことは、とくに当時、今案の私義を立てる異義の発生に際し「止三数返失称名事」を「浅猿浅猿無慚無慚」と評する言葉のなかに、多念相統の高調が窺知される。

ついで下巻に入ると、『選撰集』に明かす念仏と『大智度論』に明かす念仏とを、別と通の關係すなわち從別徹通の趣意を以て述べる。今、前に上巻で留意したところと対照しながら、その特色を列記してみよう。

まず、最初の問答は「念仏三昧」について、念仏が所念の仏を離れない値遇仏について、因地の低位の菩薩を嬰兒、果地の上位の如来を母のごとき關係にあると説くが、これは上巻第三篇中の問答(第十二・十三問答)に、法蔵選撰の本願が「地上真位之發願」と「地前凡位之發願」の両方にあつたとする事を併せて考えれば、法蔵に總別二願があり、したがって念仏にも二種あるとして、さらに万行(諸行)を總、口称名号を別として、広略開合を特に天台的な真如一理・般若一法の理事において説明した事は、その学風によるところといわねばならない。このことは、これにつづく『觀經』の「三福、者是三世諸仏淨業正因」による、いわゆる三福正因説をかえりみて、『大論』の六波羅蜜を前五の「福」と第六の「智」に分け、こうした福智の菩薩の六波羅蜜を以て三福の淨業を説き、さらに「菩薩因位之時皆以三福為淨土之正業、諸仏果位之時亦以三福為淨土之正因、約別之時明称名一為法蔵菩薩別意弘願」とするが、これは、右のような三福説によって通仏

教のなかでも浄土教の成立根拠を表明する。しかし、かかる論述による称名念仏の顕揚は、「称名念仏は末代相應之要法、下根得度易行也、随三弥陀、本願順三善導、專修一、励ニ一向称名之行、為三日夜朝暮之勤、三心無缺、四修無漏、是則決定往生之業因也、然当世、義者云依三學問、一生三慧解、依三慧解、一生三信心、具三此信心者、雖不三称名、決定往生云云、此条尤不審也」と、師源空の外儀をまもって多念の称名につとめ、聖浄二門の得道より聖道不堪の機に立ち、諸仏公認による念仏深行の価値を主張したことは、本願章に述べられた勝・易の二義が源空の独断でない事を、浄土宗内はもとより仏教界に表明するものであらう。しかし、それは聖浄各立において両者の融会を意図するものであった為に、総結三選の文にみられる如き廃立選択の峻厳な宗教的批判よりの後退を認めねばならない。

三

次に、良忠の『選択伝弘決疑鈔』五巻に示された念仏義を概観してみよう。この場合、『選択集』相伝の上で、特に『決疑鈔』を選んだのは、同書の巻尾に「先師対衆示曰、我年闍齡類在一世不久、思将来癡闇、肝腑不安、雖然我法授然阿二畢、法燈何銷、然阿是子還ニ盛年一也、遺弟對ニ

此人、不可決ニ不審ニ也、云雖レ為三弄言、實是長思出也、亦過一分遺誠也、今以三代相承、轉記三卷、決疑ニ而已」と誌すように、そこに源空・弁長、良忠の「三代相承」を表わすものであり、その書名は序文に「伝者伝ニ於先師一也、弘者弘ニ於遺弟一也、決疑者仮立三賓主、粗解疑問、鈔者抽ニ乎衆文、題ニ之筆点、是故總言ニ伝弘決疑鈔一也」とあり、まさしく先師弁長の念仏義を伝受・弘通したものと認められる。

ところで、前述の『徹選択集』には『選択集』所載の八種選択の外に「二十二種選択」を加えるが、これについて『決疑鈔』には「上来種種選択之義、即是先師之遺範也、又被示云吾使下知三大概、記之汝随レ有所見聞ニ而集ニ於選択之文、可レ続ニ於此義之後、云云」(五)と記し、つづいて総結三選の文を載せて説明する。即ち、初めの「夫欲ニ速離ニ生死、二種勝法中、且闍ニ聖道門、選入ニ浄土門」とある四句は第一・教相章を、次の「欲入ニ浄土門、正雜ニ行中」以下の十二句は第二・二行章を頭わすものとしている。したがって、今は私釈にもとづくと共に、「初第一篇は判教之大綱、後十五篇即起行之綱目」(『決疑鈔』二)の『選択集』一部の能詮と所詮を、判教と起行に大別・集約して考察してみたい。

まず、第一巻で述べる二門の判教に関するものの中に

問二門得名其義如何

答云云從凡至聖名為聖道、從穢至淨稱曰淨土、俱名門者出入義也、謂出火宅入涅槃一故

という問答があり、從凡至聖の聖道門に対して、淨土門が從穢至淨である旨を示し、その聖淨二門の取捨について

問二門同顯二仏性、何捨二門、取二門、一乎

答取捨者用否意也、謂用此之時取此捨彼、用彼之時取彼捨此、今任集意對末法機、捨聖道門、取淨土門、(下略)

と、その取捨が用否の意味であり、今は『選択集』の意によつて「末法機」にもとづく事を強調する。それは『選択集』に引文する通り、聖道が「去大聖遙遠」と「理深解微」の二由によつて「今時難証」とする事を詳しく説明するものである。すなわち、ここで特に聖道と淨土が、理証の道において深と浅に対応していたものを「済凡」すなわち凡夫済度によつて淨土門を深とし、念仏が深行として価値轉換している。これについて、既に弁長は称名念仏が深行なる旨を明かし、それを受けて良忠は「一往再往、二義」を以て示した。すなわち、一往は念仏は浅行にして万機を撰するが、再往は普く一切の衆生を化し、五逆謗法の極悪を

も仏願に乗じて皆往生するところに弘深なる仏の密意のある事を説いた。

かくて、「唯有淨土一門可通入路」の典拠として「大經云」として引く「若有衆生、縱令一生造惡、臨命終時、十念相續、稱我名字、若不生者、不取正覺」の文について「大經云、者正雖引第十八本願、而兼觀經下品生意、兩經十念同本願、故斯乃約造惡機、顯念仏力用也」と、『大經』の「十念」を『觀經』の下品下生の「具足十念、稱南無阿弥陀仏」の「十念」と照応させ、とくに造惡の「機」と念仏の力「用」を顯わしたところに、淨土門選取の理由が明示されている。ところで、この造惡に関しては、とくに「縱使一形造惡」等の文について「既是一形造罪、凡夫如何專精、但能繫意、常能念仏」という問に対して、「凡夫之人、由貪瞋以造罪、由淨心而念仏、念仏造罪、雖互間雜、而由意業、隨犯隨懺、仏願力、故罪障自滅、終感仏迎也」と答え、さらに「善導大師勸下制捨諸惡、我亦如是、設雖念仏、數起罪惡、何得往生」という問に、応答する中で、「起惡造罪、凡夫雖知、諸惡莫作之理、而數忘、深可慚愧、就如是機、憑他力本願、就如是機、彌深信、自身罪惡、常能念仏、期臨終暮、現其人前、誓願不虛、必坐華台、速生淨土也」と述べる。したがって、以上の問答

を通してうかがえる事は、造惡の凡夫が如何に念仏を修するかについて、まず意業によって「随犯随懺」することが大切であり、こうした深い慚愧により他力の本願を憑み自身の罪惡を信じて、常に能く念仏すべきであるとする。したがって、このように随犯随懺すれば、仏願力によって罪障を滅し、臨終に仏の來迎にあずかる事を示すもので、今ここでは、随犯随懺する事と臨終來迎を期する事の二点を、その念仏義の特徴として挙げる事ができよう。

次に起行については、第二卷に解説する第二捨難行帰正行篇を中心に、後四卷よりの概観を試みたい。

まず、標章の文につづいて

問、捨難行二者為其難行不淨土乎

答、伝云正難二行同得往生雖得同生而難行弱

正行強也、今望下機恐難生故且捨不行對堪能機非不淨土也

と、難行では淨土往生できぬかどうかの設問に対して、師弁長よりの相伝として正難二行とも往生を得るが、難行は弱く正行は強しと、下機の立場に立つて難行では往生し難いとするもので、聖道堪能の機には難行も往生行となる事を示し、結局は両者の往生を共に許している。しかし、これは捨難歸正を以て廃立する源空の直截な「選択」を不明

瞭化して他と妥協せしめ、いわゆる二類各生を認めることとなった。しかし、これに関して、諸行往生について次の問答より考察してみたい。

問、上六品明諸行往生此文何故強嫌難行

答、上六品約隨他之機今此文約隨自之機故不相違

すなわち、廃立は隨自の機にいわれるもので、隨他の機においては諸行往生が許され、難行も認められる。ただ、この場合に懈慢の化土を除き、「難行之機自有二類一謂至心即生報土二如觀經上六品是也」と、念仏も諸行も共に報土に往生する事において、いわゆる二類一土を説くものといわれよう。

さらに、來迎・不來迎については「經上六品皆有來迎一懈慢無來迎」と、報土に往生する者には來迎がある旨が述べられ、第三卷の第七光明唯攝念仏行者篇には、弥陀の光明が遍照であるのに、念仏者のみを撰取する事について「念仏行者由弘願故得蒙光益信心不退往生易成如來親近身意柔軟滅多劫罪魔不得便臨終正念決定往生」として、以下に親・近・増上の三縁を明かす。このうち、近縁見仏の平生に対して「來迎乃是臨終」と示し、これに関して、第五卷の第十三念仏多善根篇には、諸行不

生義の過誤について

若存^{シヘバ}諸行不生義^ノ者諸経^ヲ明文皆悉^ニ破壊^シ今家^ノ定判^ニ 念成^{ナラン}虚説^ニ 況上六品^ヲ来迎^ヲ弘讀^ヲ専^ニ在^ニ余善^ニ若属^{シヘバ}虚説^ニ 釈迦^ニ陀成^レ設^ニ妄言^ニ 若云^{シヘバ}妄言^ニ 恐招^{ヘンガ}謗法^ノ之過^ヲ 者歟^ニ 不^レ可^レ不^レ慎

と釈明し、これを上述の事どもと併せ考えれば、念仏はもちろん、諸行によっても報土に往生する者は、いずれも臨終の正念により、来迎を蒙ることを示すものである。したがって、起行に関しては二類各生と二機一土説、それに来迎については臨終正念を強調したところに、弁長より良忠へ相伝された鎮西義の性格を知ることが出来る。

註

- ① 『鎮西上人略縁起』は、『聖光聖人伝』の終わりに「彦山所伝略縁起」とあり、二種の『鎮西上人伝』は『鎮西略要伝』の奥書に「夫欲^レ知^ニ委悉^ニ知^ニ敬蓮社華台房等記^ニ、今斯略要伝一簡、且為^レ備^ニ先師之報恩^ニ、且為^レ贈^ニ向後^ニ、粗令^レ録^ニ之畢、于時正応五(三) 庚寅年二月二十九日、鎮西弁師口決比

丘聖護誌」とあり、聖護は敬蓮社の『鎮西上人伝』および華台房の『鎮西上人伝』によって録したことが知られる。

- ② 『法然上人伝の研究』一七〇頁。

- ③ 拙稿「源空の浄土開宗と門下の分流」(大谷大学研究年報二四) 参照。

- ④ 金沢文庫浄土宗典研究二『然阿良忠上人伝の新研究』参照。

- ⑤ 『浄土学』第四輯の「記主年譜考」参照。

- ⑥ 「三心料簡事」のなかに載せられ、これと同種のものが親鸞の消息中に「故法然上人は浄土宗のひとは愚者になりて往生す」(『末燈鈔』六)とあり、『法然上人行状絵図』にも源空が禅勝房に示した詞として「聖道門の修行は、智慧をきかめて生死をはなれ、浄土門の修行は愚痴にかへりて極楽にむまる」(四五)とある。

- ⑦ 『西方指南抄』に「念仏ハヤウナキヲモテナリ、名号ヲトナフルホカ、一切ヤウナキナリ」(中本)ともあり、こうした分別の及ばないところに念仏があり、とくにその他力を明らかにせんとする親鸞において使用例が多い。

- ⑧ 『日本浄土教の研究』に「仏名(称名)が諸仏公認と主張されることは弁長特異の特色的主張であって」(二七八頁)といわれる。

(本学教授 真宗学)